

釣れ釣れなるままに

2004年思い出の釣行記 PART. 7

ソイは織織糸田

鹿島釣狂

☆釣行日 平成16年8月8日

☆入釣場所 雄冬岩老トンネル北口

☆釣果 ガヤ 2

未熟なり

「雄冬に行くが、釣り場を教えてくれ」と釣遊会仲間の前野氏より電話がある。午後3時頃「今、雄冬に着いた。」と再度の電話である。2度も電話を掛けてくるところをみると、私への挑発としか考えられない。早速、浮き釣りの準備をして雄冬へ向かう。

岩尾トンネルの出口に行くと、前野氏が「当然だ」と言わんばかりに私を待ち受けてくれた。前野氏の車のヘッドランプが煌々と点いている。よほど気が急いでいたか猛暑のために頭がぼーっとしていたのだろう。

今年の夏は、30度を超える真夏日が7月末から続いている。職場用の扇風機を買いに行くが、砂川・滝川のどこの電気店でも売り切れて在庫がないというほどである。本日も午前中から気温がジリジリと上がり30度を超す有り様であった。磯釣りに軽装は似合わないが、私の出で立ちはTシャツに短パン、サンダル履きというものである。釣りの道具も簡単で、浮き釣り用を2本準備して前野氏の横に並んだ。しかし、仕掛けの方は大げさで浮き釣りには似合わないが一度試してみたいと作っておいたネット仕掛けである。

2本の竿とも大きな浮子でネットにマキエを一杯に詰め込み、サンマのエサで岩尾岬と



の間の溝へ何度も打ったが、いくら待てどもアタリが来ない。

海上にわき上がった夏雲の空が夕日を受けて赤々と染まった。海は黄金色に輝き、背後には雄冬の山々のシルエットが漆黒色に浮かび上がってきた。夕暮れとともに真っ黒な水平線上に新たにできる漁り火が「海上に浮かんだ光の街」を演出し、雄冬の海岸から眺める景色が望郷へのロマンを誘う。

20時頃、前野氏に立て続けにソイが来た。場所を前野氏側に移動するがギャが2匹来ただけでさっぱりである。前野氏は浮子を小さくして繊細な仕掛けで丁寧にアタリをとりながらソイを10匹近く上げた。ギャと違いソイは繊細なのだと改めて思い知らされた。未熟なり。

☆釣行日 平成16年10月2日(土)
☆入釣場所 雄冬岩老漁港左 茂尻島(カクキの島)
☆釣果 ソイ 30cm 1 25cm 1



断末魔の光景

午前中は雨が降り続けていたが、天気が回復するとの予報なので、午後、出発する。なんだかんだで4時に雄冬に着いた。

磯はどこも波が高く下りられそうにない。一応、歩古丹まで足を伸ばしてみるが、ケーソンには波があがっており断念する。夏に入った岩老トンネル北口も足場となる岩に波が乗り越えて無理である。岩老漁港に向かうとチカ

釣りの家族がおり、タナゴを混じえて楽しんでいた。

岩老漁港に付いた茂尻島と海岸線に挟まれた湾洞では波が死んでいるのでここを釣り場に決める。荷物を取りに駐車場に戻ると、後から来た若者4名が車からどやどやと降りてきて私と同じように茂尻島に上がって模様を眺めている。慌てて自分の釣り場を確保するが私の焦燥感とは裏腹に彼らは事も無げに去っていった。

午後5時、今日は前回のリベンジをと浮き釣り仕掛けを繊細なものに戻している。1号のドングリ浮子と、0.5号の磯グレ浮子を使用するが、磯波のせいでどちらもすぐにテトラ側に流される。

それでも丁寧に打ち返していると、1号浮子の方が一気に刺さり込み慌てて竿を煽る。結構な引き込みで楽しませてくれたのは30cm程のクロソイである。0.5号の方を岸際に打ち込み手持ちで底を探った。コツコツとした微妙なアタリに合わせると25cmほどの

クロソイである。

午後8時、アタリも遠くエサもそのまま残ってくる時間が続いたので浮き釣りは断念して投げ釣り場所を探して歩く。雄冬漁港では発電機を回しながら海面をサーチライトで照らしている沢山の釣り人が並んでいた。先日から漁港の中にサケが入り、それを狙っているという。サーチライトでサケの姿を追い、おぼろげに見えるサケをギャング針で引っかけるというものである。皆が皆そんな卑しい姿なのに驚いてしまったが、今日は海に濁りが入りよく見えないので釣れないということである。浮子ルアーを流している正統派(?)がサケを上げたが、強いブナのかかったグロテスクなものであった。

さらに、港の中の舟揚場では、男性に混じって3名もの若い女性が、懐中電灯を片手にもう片方の手には大タモを持ってサケを掬おうと必死になっていた。そして舟揚場の上には何本かのやはりグロテスクなサケが息絶えて横たわっていた。私はこの断末魔の光景にうんざりしてしまい、新たに投げ釣りをしようという気持ちも萎えていってしまった。

危機管理の落とし子

10月30日(土)より11月1日(月)まで3連休である。女房は岩見沢市の文化祭

☆釣行日	平成16年10月30日			
☆入釣場所	湯泊岬右先端			
☆潮	30日	満潮	18:06	25cm
(大潮)		干潮	22:43	21cm
	31日	満潮	03:53	27cm
		干潮	11:21	4cm
☆釣果	クロソイ	350mm以下	5	
	シマソイ	350mm以下	2	
	ハチガラ	280mm	2	
	アブラコ	330mm以下	3	
	カジカ	300mm	1	
	ガヤ		7	

での合唱発表を皮切りに帯広の息子の陣中見舞いで家を空けた。私はこの連休を利用して釣りに出かけるだけ言っておいたが、本日はとてもよい天気予報なので湯泊岬へソイ釣りに行くことにした。午前中から仕掛けやエサ等を準備し、13時には出発したが、暗くなるまでに時間の余裕があるので北竜まわりで増毛港の様子を伺いながら湯泊岬に向かった。

増毛港では穏やかな小春日和の中、チカ釣りの方々が思い思いに竿を上げ下げしており、順調に釣れ続けているようである。赤灯台のある外防波堤では投げ釣りの方が2名いたが釣果の方は芳しくない。

延長工事中だった天狗トンネルは片側通行であるが開通しており、マッカ岬や歩古丹、

そして天狗岩の各釣り場には出て行くことが出来なくなっている。雄冬界限では新道やトンネルの開通とともに旧道の入り口に鉄条網が張り巡らされ、次々と釣り場が失われていく。

豊浜トンネル崩落による死亡事故では、危機を予知しながら手を打ってこなかった開発局が責任の矢面に立たされた。このことをきっかけに開発局では崩落の危険があるトンネル等の改修の際、旧道を利用しての事故をも警戒し、万全の策を講じているのだろう。私には責任逃れの次善策としてしか考えられなく、なんだか胡散臭いような気がする。海岸線に人が入り込めないような状況にすることが開発局の仕事ではないだろう。安全に対する危機管理は大事なことではあるが、共有の財産である海岸を国民から取り上げてしまうのは如何なものか。自然相手の遊びに危険はつきもので、それを承知で楽しんでいるのだから自己責任のとり方の問題だろう。釣りを愛する者の端くれとして実に残念なことだと思うのである。

ソイと戯る

16時、湯泊岬に着いた。自分の庭状態になってきた岬の左先端部では3名の釣り人が先行しており、釣果を訪ねるが芳しくない。何度も湯泊岬を訪れていたのだが海が荒れていたために入ることができず、久しぶりの入釣だという。私には初めての入釣になるが右先端部に釣り座を構える。背後の大岩の隆起が海底にまで続いているように見るからに根掛かりしそうだが、ソイたちには格好の住処となるような磯模様である。



いが浅いのかすっぽ抜けたり、ハリ掛かりしても手前に張り出した岩盤に当てて取り逃がすなど思うに任せない。根掛かりも多い。浮き釣りの方は一気に浮子を引き込むようなアタリは出ない。モゾモゾとしたアタリに竿をゆっくり引くとガクンとしたアタリが出てクロソイ



暗くなるまでのわずかな時間は遠投の竿がチョコマカと何度も揺れていたが小型のギャであった。夕日が水平線の向こうに落ちてからは、竿を一気に引き込むアタリが始め、予断を許さない状況になってきた。食



やガヤが釣れた。丁寧にアタリを取りながら何とか冒頭の釣果となった。



3.5 cmほどのシマゾイを手にしてフラシに入れていると、左先端部にいた釣り人がやって来て釣果を訪ねる。フラシの中に入った20尾ほどの獲物を肴に話が弾んだが、アタリが遠くなったので自分たちは引き上げると言う。

干潮時の2.3時を回るとアタリはびたりと止まった。まだエサも残っているので明け

方まで釣り続けたが、結局、澄み切った初冬の月明かりに照らし出された穏やかな海を眺めながら瞑想に耽（ふけ）ることとなった。沖の漁り火の輝きが薄くなってきた4時頃、余ったイカゴロをマキエにして岸際に投げ入れてから2本バリ仕掛けを入れると間もなくクロソイが来た。釣れ続くことを期待したが、その後はまた、同じような状況であった。午前5時、本日の釣行に満足して湯泊岬を後にした。



追言 ハチガラの生命力には驚かされる。帰宅後、バツカンの中からバタンバタンと音が聞こえてくる。バツカンに水道の水を張ると2匹とも元気に泳ぎだした。